

# 生きている私たちと音楽と



田原 さえ

(ピアニスト・昭和音楽大学講師・  
(一社)ミュージックプロデュースMHKS 理事)

私たち MHKS (エムエイチケース) では、対象者が 30 名弱という少ない数ではありますが、昨年 3 月～5 月、そして更に 10 月(「答えたくない」という辞退者も増え、20 名程度の回答)の 2 回、音楽を生業とする方たちにアンケート調査を行いました。様々なコンサートが中止になったり、レッスンができなくなったり、と収入が減少した方は、ほぼ全員。10 月に 2019 年度前半と 2020 年度前半の収入を比較していただいたところ、半数以上が前年度より 50%以上の減額となっていました。また、音楽は「音」が命ですから、オンラインでのレッスンも様々な条件がそろわないとなかなか難しい。それでも、やらないよりは……ということで工夫してなさっている方もおりました。また、対面でのようにはいかないでレッスン料を割引いたり、中には無料にした、という方もいらっしゃいました。そして、皆さんの不安や懸念の最大の対象は、やはり「いつ仕事(演奏活動もレッスンも)が元にもどるか分からない」ことでした。もちろんどの職種でも大変であることは同じですが、特に音楽は「他人との直接のコミュニケーション」が大前提です。このコロナ災禍は、まさにそこを直撃しました。

確かに、新しい発信の方法としては、動画を SNS 上にアップしたりオンラインで遠くの方と(外国も含めて)つながったり、ということは新たな可能性を秘めていると思います。ですが、私たち自身が生身の生き物である以上、いわゆる「ライブ(live=生きる、という意味でもありますね)」で同じ時間、同じ空間、そして同じ音楽を共有することに代わるものはないのです。それは「一期一会」という言葉が表すように、今のこ

の瞬間が二度と戻らない人生の中で、肌のぬくもり、息のあたたかさ、眼と眼でかわす言葉の要らない対話……それらが息づいているからこそ、感じられるものです。まさにそれは“生きて”います。

色々な考え方がありますから「100%の正解」というものではありません。そのような中で MHKS は、感染拡大対策を施し、客席を半分の 30～40 名に限ってのサロンコンサートを昨年から行ってきました。主に、お客様の前で演奏する機会が減ってしまった若手の音楽家たちによるものでしたが、そのほとばしる若い感性から大きなエネルギーを受け取ったお客様たちは「来て本当によかった」「生の音に心が震えた」と、涙を浮かべる方も少なくありませんでした。また、幸いにも榴岡児童館で実現できた第 8 回仙台国際音楽コンクール関連事業「街かどコンサート」での、お母さんと子供たちの嬉しそうな笑顔も忘れることができません。

まだまだ予断を許さない状況ですが、演奏者として、また企画者として、生きる営みである音楽をこれからも皆様にお届けしていきたいと思っています。それがどんなに小さなものであっても、必ず明日につながっていくものですから。

